ちょっと気になる話です 223

2017年国際芝草学会に参加して

アクション植物科学研究所
農学博士 宇城　正和

国際芝草学会は、オリンピックと同じく4年ごとに開催される。前回は北京で、13回目の今回は米国ニュージャージー州ニューブランズウィックで開催された。この街には全米でも8番目に古い歴史を持つ名門ラトガース大学があり、大会は国際芝草学会会長である、ブルース・クラーク教授率いる同大学のスタッフが担当した。筆者は今回も発表する機会に恵まれたが、研究に割ける十分な時間がなく、準備不足で大会中も他の研究者の発表をゆとりを持って聴くことができなかったというのが本音である。

多くの参加者は、大会が開催されたハイアットリージェンシーホテルに宿泊したが、筆者はバスで10分以上離れたところにあるモーテルを利用した。自費だったせいもあり、安価な場所を選んだ。それでも1泊6000円ほど。今回は細かな内容には触れず、筆者の感性に残ったことを書いてみたい。

大会テーマ

今回の大会テーマは「変化する環境課題の解決を図る」"Meeting the Challenges of a Changing Environment"であった。このテーマは「異常気象が日本だけの問題ではなく、世界的問題であり芝管理の上からもどのように対処していくのか」という重要性を示している。4年に1回の大会なので、どうしてもオリンピックのように各国が研究レベルを競うことになり、米国は芝草学の最先端で世界をリードしているという自負が感じられた。

また、芝草学のバイブルともいえる「芝草：科学と栽培」を著わしたベアード博士も参加しておられた。アジア勢では、中国、韓国、日本が頑張っていた。中国を最初に挙げたのは、中国本土から米国の大学に留学した研究者の発表が多かったからである。

前回の北京大会では前会長リーバオ・ハン教授の本拠地・北京林業大学を訪問したが、ここには芝草研究所があった。中国にとって芝草はスポーツターフとしての価値や公園、大学構内等の住環境の改善だけではなく、辺境地等の土壌保全のためにも重要視されている。

バルタスロールGCを見学

オプショナルツアーでは、USGA博物館とテストセンター、それに由緒あるバルタスロールゴルフクラブの見学コースを選んだ。テストセンターで面白かったのは、2種のゴルフボール、つまり表面がツルツルのものと通常のディンプルのついたゴルフボールを試験機で一定の打力・方向で打ち出してみせてくれたことだ。

ディンプルボールの方がはるかに遠くまで飛んだのには驚いた。ディンプルがあるかないかによって飛距離がまったく違ってくる。これには揚力と抗力が関係するらしい。米国の実証主義を垣間見た思いがした。

バルタスロールGCは会員制の超名門ゴルフ場で、年会費も信じられないほど高額。解説してくれたスーパーインテンデントのオフィス（個室）も立派なものだった。日本のグリーンキーパーとはまったく次元の異なる世界。水管理はシステム化され、芝管理も見事というほかはなかった。

トワイライトハーバークルーズでは、チャーターされた船に乗って、

ニューヨークの「自由の女神」像近辺まで夜景と開放的な雰囲気を楽しむことができた。船内ではディナーとともにディスコダンスもあり、クラーク会長も積極的に参加して会場を盛り上げていた。筆者も昔取った杵柄で踊り狂い、ディナーをほとんど楽しめなかったという恥ずかしい有様だった。

ゾイシアシンポジウム

今大会で特徴的だったのは、大会の最後にゾイシアシンポジウムが開かれたことだ。これは、2年前に沖縄で開かれた日本芝草学会主催のゾイシアシンポジウム（日本、韓国、中国、オーストラリアの講演者が発表）の影響が大きい。ゾイシア属の芝（コウライシバ等）は暖地型芝草であるが、夏の熱暑や水不足、病気や擦切れに強く、管理もしやすい。このことから、地球温暖化の現代にあって大きな注目を集めている。筆者の発表が「ゾイシア属の葉表皮にあるシリカボディ（二酸化ケイ素の粒）について」だったので、口頭での発表とともにゾイシアシンポジウムでもポスター発表をすることになった。今後、ゾイシア属のスポーツターフへの利用が加速するものと思われ、米国による好適品種の選抜、開発が進むことだろう。

日本には優れたゾイシア属の基礎研究と遺伝子資源がありながら、またしても米国に後れをとるのだろうか。

以前、世界をリードしていた日本の水産学に身を置いていた筆者としては、芝草学でも日本の研究者が増えて世界を席巻してほしい、と強く望みたい。

バルタスロールGCのスーパーインテンデントの部屋

将来に向けて

今回の国際芝草学会では、米国の特色がよく出ていた。前回の北京大会のスタッフはすべて学生さんが担当していて、若さ漲るよさがあった。次回21年はスウェーデンで、25年は日本の埼玉県で開催される。1989年に日本で初めて国際芝草学会が開催されてから36年ぶりとなる。前回とはまったく違う日本経済の状況とゴルフ場経営、さらに加速するであろう地球の気象変動。どのように大会を盛り上げていくのだろうか。25年大会は、日本のゴルフ場の未来とも密接に絡み合ってくるだろう。

近々で見れば、2019年にラグビーのワールドカップ、20年が東京オリンピックだ。また、22年には日本芝草学会の50周年記念を迎える。この飛び石で続く大きなイベントを活用して、日本国民に芝草の大切さと素晴らしさをもっとアピールしていけないものだろうか。

クルーズ船内でのディスコダンス

国民の意識を箱モノやインフラのハード重視行政から、子育てや住環境を優しくするソフト重視行政に変えていけないものか。

学校、公園などの住環境にもっと芝生を、緑をと唱え続ける。このような「緑が意識を変える」発想（二見恵美子氏より、E.M.I.Project）と実現が、巡り巡ってゴルフ場の存続にもよりよい大きな影響を与えていくことだろう。

国際芝草学会は単なる研究者の発表の場とも捉えることができるが、欧米ではこの学会に参加する研究者たちが大学等で研究と教育を行い、常に新しい発想で各時代のスーパーインテンデントたちを育てあげてきた。

また、現場からは研究機関へのフィードバックが絶えず行われている。日本も欧米並みに大学での芝草学が隆盛し、基礎・応用研究と教育のバランスをとって優秀な芝草管理者を育てていく必要がある。

25年に日本で開催される国際芝草学会。芝草は人類に大きな影響を与える巨人である。それを、日本がどのように扱うかを示す試金石となるのではなかろうか。